

「大阪新美術館」誕生で、大阪・

～ 川筋を活用したミュージアム群による産学共創へ ～

1983年に大阪市が構想を発表して35年。水都大阪のシンボルである中之島に、ようやく新たな美術館が誕生する運びとなった。モディリアーニや佐伯祐三など、世界もوراやむ近現代美術5,600点以上(評価総額約260億円)を所蔵する「大阪新美術館(仮称)」を建設する。当初の計画よりは縮小されたものの、2017年2月、大阪市による公募型設計競技(設計コンペ)の結果、国内外68件の応募の中から株式会社遠藤克彦建築研究所の提案が最優秀案に決定した。2018年度中に具体的なプランを固め、同年度末に着工、2021年度の完成をめざす。

遠藤氏の提案した大阪新美術館とはどういうものか。美術館やホールなどが建ち並ぶ`文化の中之島`をどう変えるのか。大阪新美術館によって中之島をどうブランディングし、地域を活性化していくのか。折しも文化・芸術・マスコミ関係者による「大阪市新美術館を考える会」が発足(7月6日)した。

設計者である遠藤克彦氏、有識者の方々や行政担当者に大阪新美術館建設と中之島への思いを語っていただいた。

(絵画所蔵先：大阪新美術館建設準備室)



アメデオ・モディリアーニ「髪をほどいた横たわる裸婦」(1917年/油彩)



佐伯祐三「郵便配達夫」(1928年/油彩)



パッサージュでつながる「都市のような美術館」

遠藤克彦氏 建築家・株式会社遠藤克彦建築研究所代表取締役

中之島に新たな流れを

設計コンペに参加するにあたって、大阪市が作成した実施要領を読み、35年の長きにわたって建設できなかった美術館を今こそ実現させるのだという、大阪市の強い意思を感じました。冒頭に新美術館のめざすべき姿*が示され、建物や敷地、外構などの設計条件や、つくりたい美術館のイメージがしっかりと記されていました。その一例が「パッサージュ」というコンセプトです。

パッサージュとは、ヨーロッパの小径というか、屋根がついているアーケード、もしくは入り組んだ小径を意味する言葉です。そこは人の繋がりが自然発生的に生まれる場所で、新美術館もそうした存在にしたいと要領の中にはっきりと謳っていたのです。大阪市が求める空間のイメージがあって、その具体的な

形を私ども専門家に委ねたという実施要領は、私の経験上、希有なケースでした。

私自身、設計活動を続けて、10年ごとに大きな節目がありました。このコンペに勝ち、自分自身の節目と大阪市の覚悟みたいなものが重なったということもあって、大阪にオフィスを開設しました。打ち合わせがスムーズに行えるだけでなく、大阪のことが肌感覚でわかり、しかも応援してくれる人たちの言葉を聞きながら設計が続けられる。大阪にいて中之島のポテンシャルをよく理解でき、なにより新美術館にとっていいことだと思いました。

この美術館は「浮いている黒い箱」が印象的かと思いますが、実はオーソドックスな提案です。一つはまわりのオフィスビルはグレー系の建物が多い。そんなに色気がないところに美術館がたたずむ風景をつくりたかった。馴染むというよりは、その建物があることによって、周囲と少しずつ繋がって行って、まわりの風景も変わっていくような象徴にしたいと思いました。

二つめに、南海トラフ地震への対策です。美術品は3階よ

中之島はどう変わるか



大阪新美術館外観イメージ(株式会社遠藤克彦建築研究所提供)



大阪新美術館建設予定地(左端は大阪大学中之島センター)

大阪市北区中之島4丁目32-14
敷地面積:約12,874㎡(美術館は約15,000㎡)
工事費(概算):130億円以内

りに展示・保管し、1・2階は市民に開かれた普段使いのエントランス・レストラン・カフェにする。そこから上がっていくことで、都市と美術館が繋がっていることを認識できます。これにより美術館に行くという確たる目的がなくても、パッサージュを回遊しているうちに美術品の中に入り込んでいるという感覚を体験できます。市が要求するパッサージュは、都市と美術館がかなり混在した公共空間だと思いますので、1・2階から上がっていくところを立体的なパッサージュ、というコンセプトにしたのです。

数々のスタディ模型から導いた答え

こうした設計アイデアは、決して一回のスタディで生まれたものではありません。私たちは、大阪新美術館の設計でやるべきことを時間をかけて検討しました。40案ものスタディ模型(設計内容を確認するために初期段階で作る簡易模型)を作り、その全てにダメ出しを行い、その過程で大阪新美術館ができることで「中之島」というまちがどう変わるのかを十分に考慮しました。

大阪新美術館は全方向に開かれたエントランスを持ち、国立国際美術館や関西電力、堂島川、今後開発が進むであろう中之島の西側エリアともアクセスすることで、場としてのポテンシャルをさらに高めることができます。美術館1階にカフェやレストランを配置したのは、そうした周辺地域への賑わいの波及を考えてのことです。それを誰もが行き来できる1階に配置することで、さまざまな方向から人々を誘引すると同時に、浸水災害から美術品を守ることも可能ですから、パッサージュと美術館機能の二つの条件を満たすことができました。

中之島の美術館クラスター

中之島には大阪市立東洋陶磁美術館や国立国際美術館があり、今年3月には民間の中之島香雪美術館(中之島フェスティバルタワー内)がオープンしました。それぞれに異なる特色があり、素晴らしい美術品を収蔵しています。これらを観てまわることで、日本と西洋・東洋の美術史を俯瞰できるの

ではないでしょうか。また、美術館だけでなく大阪市中央公会堂や中之島図書館、フェスティバルホール、歴史的建物やレストランにいたるまで、さまざまな芸術・文化施設が歩いて廻る距離のなかに集積している中之島は、とても希有な場所です。大阪新美術館がこうした美術館や既存施設と連携することで、中之島における文化・芸術のネットワークを形成することができます。

つながることで場のポテンシャルを高めようと意識することは、全体の活性化にもつながる重要な視点です。その意味で、中之島の「美術館クラスター」や大阪大学が提唱する「アゴラ構想」、iPS細胞を使った先端医療研究など、美術館にかかわらず、芸術・文化・学術・医療など、ジャンルを越えたネットワークをもつことで、新たな何かが起きそうな予感がします。さらに中之島は、淀川を介して伏見から大阪市中央卸売市場につながるルートや、その先のベイエリアや瀬戸内海の商圏にもつながる「ハブ(結節点)」になるエリアです。中之島西部の開発ビジョンが明確に示されていない現在、私たち民間からも、そうした地域開発について意見を出していったほうがいいと思います。

大人が文化を楽しむ姿を見せる

今秋、関西経済同友会が対岸の堂島リバーフォーラムで「なにわの企業が集めた絵画の物語」展を行い、小学生の対話型鑑賞プログラムや周辺の飲食店と連動し大人も楽しめる美術展連動バルを行うと伺いました。

フランスのボンピドゥー・センター(国立近代美術館などがあるパリの総合文化施設)に行ったとき、学校の先生に引率された小中学生が車座になって、ピカソの絵を観ながら学芸員の説明を聞いているところに出くわしたことがあります。それは、大人の私が聞いても面白い体験でした。

私はまちづくりにかかわる仕事のなかで、子供たちにもっと夢をみさせるためにはどうすればいいかという相談をよく受けます。子供たちが美術から刺激を受けるように仕向けるために

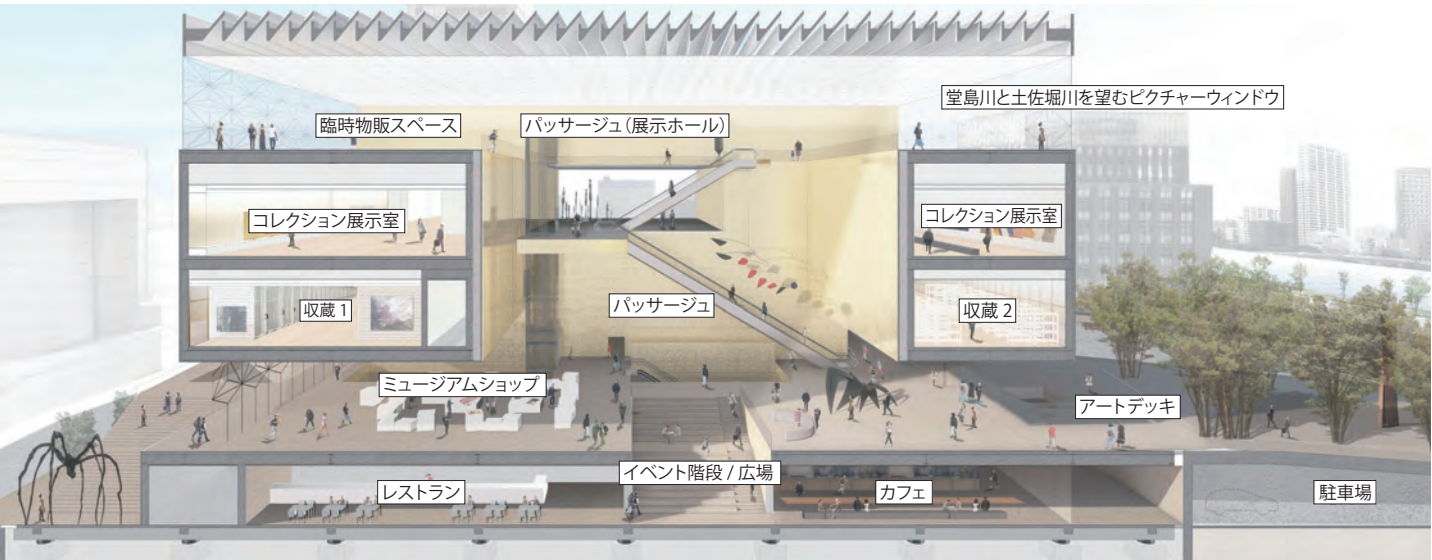
は、まずは大人が文化・芸術を楽しむことが大事だといっています。大人が生活を楽しんでいる姿を見せないと、子供は将来に夢を持っていないでしょう。美術館も同じで、お父さんやお母さんが、そこでワインや食事を楽しむようすを見せることで、子供の美術館への関心を引き出すことができるといいます。大阪新美術館もそういうふうに使ってほしいと思いますし、中之島はそうのように文化・芸術が楽しめる場所です。関西経済同友会の試みは、新美術館にとってもありがたい提案です。

*新美術館のめざすべき姿

「大阪新美術館公募型設計競技 実施要領・平成28年8月大

阪市)」より抜粋

- ・佐伯祐三らに代表される第一級のコレクションを活かして国際的な展覧会を常時開催し、海外からの観光客も多く訪れるような世界に誇る美術館をめざす。
- ・「大阪と世界の近現代美術」をテーマに、大阪市立美術館や東洋陶磁美術館にはない魅力を創造し、これまでにない独自性をもつ先進的な美術館をめざす。
- ・歴史、文化の蓄積が豊富な中之島を拠点に、周辺施設との連携や都市景観の形成についても意識し、大阪の都市格向上に貢献する美術館をめざす。
- ・運営は、民間事業者のノウハウを活用するPFI(Private Finance Initiative)手法を導入。顧客サービスに優れ、学芸員などにも使いやすい美術館をめざす。



大阪新美術館断面イメージ(株式会社遠藤克彦建築研究所提供)

大大阪時代の都市理念に学ぶ

橋爪節也氏 大阪大学総合学術博物館教授 (前館長)



東京や京都に 先じた計画

大阪における美術館の歴史は、明治21年(1888)に本町橋(大阪市中央区)の東詰にできた「大阪府立博物館中央館(美術館)」が最初です。このとき初めて「美術館」と名のついた施設が大阪に生まれたのですが、実際は見本市会場の建物で、殖産興業を主目的としていました。次いで、明治36年(1903)に日本初の国際博覧会である「第5回内国勧業博覧会」が天王寺公園で開催されたときに、会場内に美術館ができました。これも殖産興業的な意味合いの強いものでした。そして3番目が昭和11年(1936)にできた大阪市立美術館(天王寺区)です。

大阪市立美術館の建設は大正9年(1920)の大阪市議会で決議され、同12年(1923)に開館する予定でした。当時は東京市(当時)や京都市に公立の美術館がなく、大阪が先んじて計画したのです。結果的には東京や京都に追い抜かれ、昭和11年(1936)までずれ込みました。ただ一筋の通った明確な考え方があって、「学芸員が主導して収蔵品の管理や展覧会の企画を行う」という、当時の東京や京都にはない新しいタイプの美術館でした。なぜ大正時代にそんな美

術館をつくる計画があったのかというと、大正14年(1925)4月1日に大阪市が第2次市域拡張をし、それが大大阪の時代になるわけですが、そのときに、都市には文化施設をちゃんと揃えておかないと近代的な都市とはいえないというしっかりした考えが、当時の池上四郎大阪市長(第6代)を継いだ關一市長(第7代)にあったからです。

第5回内国勧業博覧会(1903年)での美術館と内部(絵画が柱に展示されている)



目指していたのは『一流の都市』

大正14年(1925)、大阪市は第2次市域拡張により人口で東京市を抜いて日本第1位の巨大都市となり、ニューヨークやロンドン、パリなどに次ぐ世界第6位の大都市と公称するようになりました。世にいう「大大阪時代」です。そして關一市長時代の昭和5年(1930)、大阪都市協会*は機関誌『大大阪』(第6巻第11号)で、「徒に人口のみの多いことが、決して

現代都市の誇りにはならない。(中略)大都市には大都市であり得るだけの都市施設が整はなければならぬ。文化的にも経済的にもその点(点)に欠(欠)けるところがあれば、それは都市として二流三流のものでなければならぬ」と呼びかけました。

大大阪時代には、まちづくりと、美術館などの文化芸術施設の建設は密接に関係していました。少なくとも大正末期から昭和のはじめにかけて、大阪市は美術館を教育・文化面で近代都市へと発展させる契機と考えていたのです。当時、大阪市は美術家協会のような組織もつくりようと考えており、実現はしませんでした。文化行政としては先見の明がありました。

国公立の芸術大学がない大阪

大阪には未だに国公立の芸術大学がなく、そうした大学に進学して美術を学びたい人は、東京(東京藝術大学)や京都(京都市立芸術大学)へ進学しなければなりません。大正12年(1923)に大阪市は美術界を支える拠点として市立工芸学校(大阪市立工芸高等学校の前身)を設立しましたが、いかんせんこれは旧制中学で、今でいえば高校にあたります。

現在の大阪人は、こうした先人たちの思いをもっと認識すべきだと思います。大阪市のホームページ(市民の声)に投稿された「美術鑑賞なんて、しょせんはお金持ちの趣味」「高いお金を払って美術品を買集めるなんて無駄」という意識にとらわれては、都市の発展は望めないでしょう。大阪市民には昔からそうした意識をもつ傾向があるようで、大正13年(1924)に天王寺で開校した大阪美術学校の校長・矢野橋村(やのきょうそん：1890～1965)は、「大阪というのは美術家を殺しこそすれ、育てるところではない」という言葉を遺しています。美術に対する人々の無理解を嘆いてのことでしょうが、だからこそ続けて「大大阪の美術をこのまま放っておいていいのか。大阪美術学校の生徒諸君よ奮起せよ」と檄を飛ばしました。

企業家コレクションを生かす

橋村の悔しい思いはよく理解できますが、そうした大阪でも、素晴らしい美術作品を個人で数多く蒐集する企業家がありました。なかでもメリヤス肌着の製造や海外貿易で財を築いた山本發次郎(1887～1951)は、大阪市出身の洋画家・佐伯祐三(1898～1928)の大コレクターでした。發次郎は、「美術品の蒐集は時勢に反した道楽のような誤解を招く恐れがあるが、美術品の蒐集は永遠的な文化事業であると信じてやっている」という主旨の言葉を遺しています。そのコレクションが大阪市に寄贈されたことで、昭和58年(1983)に近代美術館の建設が構想されたのです。実際に新美術館構想は40年もかかったこととなります。これをどう見るかです。

もう一つ、どう見るかという点では、バブル崩壊から平成という時代は何だったのかということです。平成時代は30年で終わりますから、この30年間、新美術館は準備と建設を決めただけで終わりました。バブル崩壊後に「失われた10年」とか「失われた20年」といわれますが、その「失われた30年」の一つが新美術館だったのかもしれない。それがやっと復活します。それも24,000㎡の計画が、規模を縮小して15,700㎡、つまり3分の2です。私は大阪や市民が絶対損をしていると思います。大阪新美術館の所蔵品は5,600点以上あり、現在の評価額はすごい金額になります。今年5月、ニューヨークのオークションでモディリアーニが約172億円で落札されたことがニ

ュースになりましたが、大阪の新美術館構想では、19億3,000万円で購入したモディリアーニの『髪をほどいた横たわる裸婦』をはじめ、多くの高価な作品がずっと倉庫に眠ったままになっているのです。

*財団法人大阪市協会

市民生活に関する諸問題を調査・研究し、大阪の近代的まちづくりへの関心を促すため、大正14年(1925)に關一大阪市長によって創設。月刊誌『大大阪』『大阪人』などを発行した。平成19年(2007)解散。

「阪神間モダニズム」という誤解

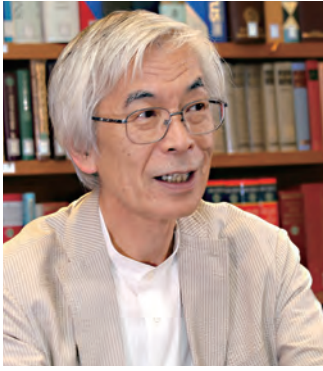
近年、大阪の近代文化・芸術を指して「阪神間モダニズム」といわれますが、これは神戸や西宮などの郊外型文化のなかに大阪が含まれているような錯覚を与える表現です。中之島や船場にある近代建築や大阪の画家たちによる美術作品は、「阪神間」ではなく「大大阪のモダニズム」です。兵庫県下の美術館が、自分たちの地域の展覧会として何度も「阪神間モダニズム展」を開催したことで、いつしか大阪もその一部と見なされてしまったのだと思います。兵庫県には兵庫県立美術館(神戸市)をはじめ、西宮市大谷記念美術館(西宮市)、芦屋市立美術博物館、伊丹市立美術館があり、尼崎市でも展覧会が開催されています。兵庫県はそうして近代美術を発信していますが、大阪は府立の美術館がなく、臨時の企画展しか開催されないために「大大阪のモダニズム」を発信する機会を逸してきたのです。また、京都の国立近代美術館(左京区)や京都市美術館(同)などでは、京都の画家たちの展覧会を度々行っています。しかし、大阪はそうした発信拠点や機会をもたなかったために、当の大阪人が大阪の美術を知らないまま今日に至り、兵庫や京都に比べ大阪の美術を一段低く見るという深刻な問題を生んでいます。

自分たちの文化への誇りが地域の発展を促します。美術館やホール、図書館、市役所などが集積する中之島は、大阪を象徴するシビックセンターであり、発信力もあります。大阪新美術館を集客性だけで考えるなら、梅田北ヤード(大阪駅北側の開発地域)につくれればいい。しかし、それを中之島にもってこることで美術館群をつくり、大阪の文化力を全体として高めようという意識が大事なのです。

◇素数、の都市をめざす

歴史的・文化的に、江戸(東京)・京都・なにわ(大阪)を総称して「三都」と呼ぶことがあります。私は、こうした都市は数学でいえば「素数」とであると主張しています。素数とは、1、2、3、5、7、11、13…と、自然数のうち1かそれ自身でしか割れない数字です。三都もこれと同じで、その都市固有の要素以外で分割できない性質の都市であると解釈できます。例えば、かつて金沢や高山、川越などの地方都市で営業戦略的に「小京都」や「小江戸」と称することが流行しましたが、これはその都市の歴史や環境に京都市あるいは東京的要素を掛けた都市、つまり素数の都市に2や3を掛けた都市であって、その都市固有の性質を示したものではありません。小京都や小江戸は素数のまちではないのです。

大阪とりわけ中之島は、ミュージアムや近代建築など川筋に文化施設が集積して、東京にもない極めて素数性の高い地域です。中之島の「川筋を活用した文化施設群」が一層洗練され、パワフルに活動できるよう大阪は努力すべきと考えます。



これからの美術館に求められること

山梨俊夫氏 独立行政法人 国立美術館 国立国際美術館 館長

互いに連携し 強化する時代

大阪新美術館の設計コンペを行うに際し、私はその審査評価会議の座長として審査にあたりました。美術・都市計画・

建築の各専門の有識者7名で構成された審査評価会議では、68者の提案の中から第1次審査で5者に絞り、その中から第2次審査を経て株式会社遠藤克彦建築研究所の提案を最優秀案に決定しました。寄せられた提案は委員の予想を上回る創造性に富んだもので、その絞り込み作業は非常に困難でした。第2次審査の対象となった5者の設計提案は、いずれも甲乙つけがたく、委員たちは大阪の新しい美術館にふさわしい設計提案を求めて、熱心な議論を重ねました。

遠藤氏の提案は、美術館としての機能や使い勝手に加え、シンプルながらも中之島に浮かび上がるような存在感のある外観や、開放的なパッサージュ空間が大阪新美術館の独自性を際立たせていました。とりわけアートデッキや美術館1階のカフェなどのサービスエリアが、大阪市が求める中之島エリアでの人々の回遊性や賑わいの向上に貢献すると高く評価されました。私も国立国際美術館としては、そうした大阪新美術館のパッサージュがこちら側にもつながるわけですから、現在、両館をブリッジでつなぐ計画を進めています。隣り合う美術館がライバル意識をもって対抗するのではなく、美術というテーマでお互いが連携し、地域の活性化に向けて共働しようという考えから、物理的にもつながろうというものです。

美術館が展覧会を開催するためには、準備に3～4年ほどかかります。大阪新美術館の開館予定は2021～22年ですから、すでに両館の担当者や関係者による話し合いが始まっています。また、大阪新美術館が完成すれば、中之島の美術館は国立国際美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、中之島香雪美術館と合わせて4館になります。こうした地域にあって、今後、美術館はお互いの連携をさらに強め、大阪が持つ美術の歴史や現状を共有し、補完し、強化する視点をもって一緒に考えることが一層重要になります。東洋陶磁美術館が開館35周年記念・日中国交正常化45周年記念で「唐代胡人俑(こじんよう)」の展覧会(2017年12月～2018年3月)を行ったとき、国立国際美術館の人体をモチーフにした彫刻9点を貸し出し、胡人俑が並ぶ空間に現代美術の彫刻を展示しました。こうした作品の貸し借りや、展覧会の企画自体を共同で行うこともあるのです。

大阪の美術館の課題

美術館の役割は社会状況によって変化する部分もありますが、核となるのは自分たちがどんなコレクションを持ち、どんな作品を集めていくかということです。例えば私も国立国際美術館は、20世紀以降の欧米美術や20世紀後半から現代にかけての日本、欧米、アジアの美術を中心にコレクションしており、展覧会活動もその時代にもっとも力を入れています。

一方、大阪という視点で見れば、日本の美術史上重要な役割を果たしているのが近代美術で、黒田重太郎、鍋井克之、小出楯重などに代表される優れた作品が多くあります。

しかし、大阪では豊臣秀吉や戦国時代の堺の美術などは紹介される機会が多くても、近代美術に関しては多くのコレクションがあるにもかかわらず、きちんと検証したり、紹介していく美術館がありません。大阪新美術館には、そうしたことに力を入れてほしいと思います。また、大阪には家電メーカーをはじめ大阪発祥の企業が多く、大阪新美術館ではそうした企業が保有するプロダクトデザインを調査し、企業と連携しながら研究していくことも重要だと思います。

大阪は企業コレクションや個人の美術コレクターが多いところですが、私は神奈川県立近代美術館に勤務していた頃、企業が所蔵する絵を貸してもらいに大阪へ来たことがよくありました。そのように企業や個人がどんな作品を持っているかを知っておくことも美術館の大事な仕事です。大阪新美術館は公立ですから、財政的な支援も含めて経済界との協力体制をつくっておかないと、市の予算だけでは運営が大変です。そのためにも美術館の人たちには、色々な企業を足繁く回り、協力を取り付けていく地道な努力が必要です。他方、企業の方々には、もっと美術に関心をもっていただきたいとも思います。

美術館の役割でいうと、ここ30年ぐらいの間に外部に対する教育普及面での働きかけが活発になってきました。そのひとつは学校と連携して先生や生徒に来館してもらうよう働きかけることですが、そもそも古い美術館には講演や対話型鑑賞などのワークショップをするスペースが少なく、収蔵庫や展示室の空調管理の基準も厳しくなっている現在、外国のいい作品をもってこることも困難です。新しい美術館にはそうしたスペースや設備が必要ですし、近年はレストランやショップといった付帯施設も重視されます。ときにはコンサートなど美術活動とは異なる用途に使用する懐の広さが求められます。そうした教育普及や地域貢献も含め、これからの美術館には、ご来館いただくためのさまざまなきっかりづくりも必要になるでしょう。





大阪大学中之島アゴラ構想

*アゴラ…「広場」を意味するギリシャ語

西尾章治郎氏 大阪大学総長

共創による 魅力的な文化都市 形成を目指して

「大阪大学中之島アゴラ構想」、大阪大学は今、この構想の具体的実現に向けて準備を進

めています。

大阪市北区中之島4丁目は、大阪大学発祥の地であり、大阪の政財界や市民の方々の熱烈なご支援により、地域社会と結びついた「市民主導の帝国大学」として昭和6年(1931)に誕生した本学にとっては、特別な意味を持つ場所です。

また、中之島には近代的なオフィスビル、行政機能、歴史的建築物、コンベンションホール、コンサートホール、美術館、科学館、リバーサイドのカフェ・レストランなどさまざまな集積があり、市民にとっても特別な魅力のある場所です。

この中之島の地で、さまざまな知的リソースやビジネスリソース、人材が集い、これまで進化してきた本学の知と交差させることによって新たな社会的価値を発信する拠点を作りたいと考えていたさなか、大阪府と大阪市からの依頼を受け、この構想を提案しました。

具体的には、本学が所有する大阪大学中之島センターを中心に、アート、社会学共創、産学共創の三つの分野で、多様なステークホルダーとの共創(co-creation)活動のハブとなる拠点の形成を計画しています。本学が有する卓越した学術・芸術・技術という三つの「術」をもって、中之島エリアの、ひいては大阪の「文化」の向上に貢献していきたいと考えています。

とくにアートの分野では、大阪市が建設予定の新美術館、中之島のシンボルの一つとして定着した国立国際美術館といった周辺の芸術関係機関とも深く連携し、共同研究や展覧会・パフォーマンスなどの共催といった活動や、都市における芸術的な空間として京阪電車なにわ橋駅内に開設された「アートエリアB1」における多彩な活動をさらに充実させていきます。このことにより、大阪の中心地である中之島に、大阪の芸術の深化に寄与する魅力的な拠点を形成することができればと思います。

社会学共創においては、ビッグデータの市民向け検索・閲覧機能や、本学の精神的源流である適塾を通じた歴史啓発活動、医療通訳や各種情報などの多言語化に対応した共創事業、現在も行っている社会人向けの学び直しの場の提供やアウトリーチ活動の展開を構想しています。

産学共創においては、イノベーション人材の育成や、都心の強みを活かし、さまざまな企業に対して本学の技術や研究情報を発信し、企業との共創活動に繋げていく、オープンイノベーションの窓口の形成などを構想しています。

これらは、総合大学として幅広い知を持ち、さらには大学の
(p7へ続く)



※写真提供:大阪大学、国立国際美術館、東洋陶磁美術館、中之島香雪美術館

地域貢献度調査や最も革新的な大学ランキングにおいて、国内トップにランキングされた実績のもとに「地域に生き世界に伸びる」を標榜する本学の強みを活かした取り組みであり、まちづくりや産業創出に必ず貢献できることを確信しています。
以上に掲げる中之島アゴラ構想の実現を強力に推進す

るために、大阪大学中之島センターを大幅に改修し、機能強化することを計画しています。関係機関と緊密な連携を図りながら、本学にとって、そして市民にとっても特別な場所であるこの中之島の活性化に貢献し、大阪、関西の盛り上がりにつなげていきたいと考えています。

地域活性化の起爆剤として期待 大阪市新美術館を考える会

2018年7月6日／リーガロイヤルホテル

大阪新美術館の設計が完成に近づいた今年7月6日、東西日本を考える会*は、同美術館の設計者で同会のメンバーである遠藤克彦氏を囲み、新美術館の具体像について話を聞いた。また、大阪新美術館担当の大阪市経済戦略局長の柏木陸照氏を招き、「中之島の新美術館がめざすもの」と題して、大阪府がめざす新美術館の新たなあり方などについて説明を受けた。

*東西日本を考える会

大阪商工会議所会頭だった佐藤茂雄氏(2015年没)が、「文化立国としての日本のあり方について自由に語り合う場をつくろう」と呼びかけたことに端を発し、弁護士の和田誠一郎氏が幹事となって賛同者を募り、文化・芸術・マスコミ関係者ら約50人のメンバーで構成された。公益財団法人関西・大阪21世紀協会の堀井良殷理事長が代表世話人を務める。



約50人が出席した大阪市新美術館を考える会
(2018年7月6日)



中之島の^{みちてる}新美術館がめざすもの

柏木陸照氏 大阪市経済戦略局長

新たなあり方を 創造する

大阪市の博物館群は、大きく三つのタイプに位置付けられます。市立美術館や東洋陶磁美術館のような特別展

を核に事業を展開する「美術系」、自然史博物館のように常設展を核に学校利用や市民向けの各種事業を展開する「自然系」、歴史博物館や市立科学館のような美術系・自然系それぞれの要素も兼ね備えた「歴史・科学系」です。大阪新美術館はこうした既存のタイプとは異なる、今までにない新たなあり方を創造する美術館として位置付けています。基本的には「社会教育の拠点」「情報発信の拠点」「ビジネスの拠点」「にぎわいの拠点」といった四つの拠点機能を備えますが、こうした機能だけにとらわれるのではなく、新たな機能をどんどん付け加えてまいります。いわば常に自己変革を遂げていく「進化系」の美術館です。大阪府は、こうした新美術館で生まれる新たな真善美が大阪全体の価値を高め、創造していくことをめざします。

*四つの拠点機能

- 1) 社会教育拠点…子供のためのワークショップ、若手作家の発掘やキュレーター育成、アートを通じた生涯学習の場の提供など。
- 2) 情報発信の拠点…第一級のコレクションを活用した展覧会、海外の注目を集める具体美術アーカイブ、企業や大学との連携によるIDAP(インダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト：工業デザインの保存記録事業)など。
- 3) ビジネス拠点…話題性の高いショップやレストランの誘致、美術品を活用したコンテンツビジネス、企業のレセプション会場としての活用など。
- 4) にぎわい拠点…国立国際美術館や市立科学館との連携、芝生広場などによる周辺住民への憩いの場の提供、集客イベントの積極的な展開など。

全国初の地方独立行政法人化

新たなあり方を創造するために、大阪府は新美術館の運営について二つの革新的な改革を行います。一つは「ガバナンス改革」で、平成31年4月より大阪市立の博物館・美術館すべてを、全国の自治体のなかで初めて「地方独立行政法人」による運営に移行します。美術館や博物館を、継続性・機動性・柔軟性・自主性を備えた地方独立行政法人に移管させることで、経営と運営の一元化を図ります。二つめは「マネジメント改革」で、新美術館の経営にあたってはコンセッション方式によるPFI*を導入し、民間企業に新美術館の運営をゆだね、一定のルールのもとに自由裁量で運営に携わってもらいます。これによって民間企業の創意工夫と学芸員の専門性のコラボレーションによる魅力ある運営の実現を図っていきたく考えています。

*コンセッション方式によるPFI

コンセッション(concession：譲与、免許)方式は、事業者が免許や契約によって独占的な営業権を与えられること。PFI(Private Finance Initiative)は、公共施設の運営や維持管理などに民間の資金とノウハウを活用し、民間主導で効率的かつ効果的な公共サービスの提供を図る考え方。イギリス発祥の概念で、「小さな政府」を掲げるサッチャー政権下の1992年に実施された。

美術館の未来像を示す

中之島のまちづくりを推進する観点では、大阪府は新美術館を中之島におけるランドマーク的な唯一無二の存在にしたいと考えています。ここでは美術だけではなく、音楽や伝統芸能など「アート」と呼ばれるあらゆるものを融合させていくことで、美術館そのもののあり方を創造していきます。それはとりもなおさず美術館の未来像を示すことであり、「見通せない未来をどう見通すか」「異なるものをどのようにして融合させるか」といった新しい芸術のあり方を体現して見せることなのです。

(「大阪市新美術館を考える会」での発言要旨)